

「喜びがあるように」  
ヤコブ 1：1-4

○導入

皆さん、おはようございます。このたび私は、今年から約3年間、長年育ち、仕えてきた土浦めぐみ教会を離れ、韓国・水原市にある韓国合同進学大学院、略してハプシンへ進学することになりました。その出発を前に、このように惜別説教の機会を与えてくださった神様、そして土浦めぐみ教会の皆さんに、心から感謝しています。

2018年、TCUを卒業したとき、私はセロナム教会の日本語礼拝部で奉仕するため、めぐみ教会を離れる予定でした。そのとき、教会の一人の青年が、私の知人に声をかけ、1年分の手作りのディボーションノートを作ってくれました。実は今回の留学にも、そのノートを持っていこうと思っています。

そのノートの4月11日のページに、洪先生がこう書いてくださいました。今、私たちが先生の講解説教で読み進めている箇所です。

エペソ 4：1 「さて、主にある囚人の私はあなたがたに勧めます。あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」

主に与えられたコーリングに、ふさわしく生きること。そして、使徒パウロにとってのコーリングは、主のために囚人になることだった…

僕に主のために囚人となる覚悟があるだろうか…あけちゃん、主のために囚人となる覚悟、コーリングはありますか…

一緒に主のために囚人となりましょう。

しかしその後、働きに必要なビザが下りず、セロナム教会へ行く道は閉ざされました。けれど感謝なことに、めぐみ教会での奉仕が与えられ、総務主事や TEENS 主事としての働きを通して、神学生の時以上に、教会について学び、宣教の実践に携わらせていただく時となりました。

一方で、働きが続くほど、大学院進学のための祈りは少しずつ遠のき、「もう諦めたほうがいいのかもしれない」と思うようになりました。

そんな中、2023年にポール先生がめぐみ教会に来られ、私のためにも祈ってくださいました。そのとき、先生は私に「飛び込みなさい。」とされました。

最初は意味が分かりませんでした。思い巡らすうちに、諦めかけていた大学院進学のこと浮かびました。しかし当時は TEENS 主事の働きも始まっていて、「このタイミングでそれは無理だろう」と思いましたが、もう一度祈り始めることにしました。

すると2024年の秋、サバティカルをいただいて韓国を訪れた際、いくつかの神学校を見学する機会が与えられました。その中で参加した学内礼拝で、韓国の前に訪れたネパールにいたときと同じ御言葉「まず神の国と神の義を求めなさい。」(マタイ6章33節)が与えられ、その御言葉に背中を押されるように、帰国後、大学院進学の準備を始め、感謝なことに、神様がこの道を開いてくださいました。

そして、年が明けて5日から、私はハプシンにギリシャ語の授業を受けに行きました。初日の授業、緊張している私たちに教授はこう話されました。

ガラテヤ6:17で、パウロは、「私は、この身にイエスの焼き印を帯びている」と言っています。ここで使われている「焼き印」という言葉は、ギリシャ語でスティグマ。この言葉は、新約聖書の中でこの一度しか使われていません。しかも複数形です。それはパウロがイエス・キリストを伝える召しに従い、キリストの囚人として歩む中で受けた数々の傷のことを指しています。これらは、意味のない理不尽な傷ではありません。イエス・キリストに従ったがゆえに刻まれた、イエスの焼き印であり、キリストから与えられた証、そして痕跡です。

今日から皆さんも、死ぬまで困難の道、決して楽とは言えない道を進んでいくことになるでしょう。これからの3週間もその一部です。それは、「もっと低くならなければならないから」でも、「何かを手放さなければならないから」でもなく、神の前で自分が崩されていく経験を通るからです。皆さんは、これからどんなキリストに従った痕跡を残していくのか。この3週間を覚え、その先に続く3年、さらに牧会をしていくことになる。だからこの3週間で単なるギリシャ語の学びとしてだけでなく、神の前で自分自身と向き合う大切な時として過ごしてください。

この言葉を聞いた時、私は洪先生がノートに書いてくださった「主のために囚人となる覚悟、コーリングはありますか」という言葉を思い出しました。

この問いは、牧師や宣教師、伝道師、献身者だけに向けられた問いではありません。これは、イエス様に従う一人ひとりに向けられた問いです。では今日はヤコブの手紙のみことばから共に、キリスト者とは何者なのか、そしてどのように生きることを神様が私たちに期待しておられるのかを、確認していきましょう。

では、本日の聖書箇所をお読みします。新約聖書**ヤコブの手紙 1 : 1-4**のみことばです。お読みします。**ヤコブの手紙 1 : 1-4**

### ○キリストのしもべ

1節は手紙の送り手、受け手、挨拶文からなっています。これは新約聖書の他の書簡にもよく見られる始まりです。ヤコブは自分について、神と主イエス・キリストのしもべと紹介しています。ヤコブは、イエス様の兄弟で、エルサレム教会の中心的指導者でもありました。

そんなヤコブが自分のことを神と主イエス・キリストのしもべと他の教会に紹介しています。彼はその当時のキャリア、教会での役割などよりも、ただただ神様やイエス様との関係だけをもって自分を紹介しています。このことなしに他の肩書は何の意味もなさないかのように。神様とイエス様との関係の中に自分のアイデンティティーを見出した人、それがヤコブなのです。

私たちは自分自身を神様とイエス様との関係の中ではなく、世の中で見つけようとするものが多くありますが、ヤコブを通して、私たちも神様とイエス様との関係の中で自分自身を見つけた者であり、神様とイエス様なしには説明がつかない者であることを教えられます。

ヤコブはしかも、自分のことを神とキリストのしもべと言います。日本語では、所有を表す「の」という言葉は1つですが、ギリシャ語では、自分が完全に神とキリストのものであることが、強く、繰り返し強調されています。主のものであり、なおかつ主に属する者ということ、その当時聞けば人たちがすぐに理解できる「しもべ」という言葉を使って。主人から独立したものではなく、主人に所有された者、それがしもべであり、奴隷です。主人中心に生き、主人のために従って生きる存在だと、イエス様の兄弟でもあり、エルサレム教会の中心人物だったヤコブが言ったのは、教会に大きな衝撃を与えたと思います。

そして、私たちにもこう問いかけます。「私たちは今キリストのしもべとして生きているか。キリストのしもべでないなら、何のしもべとして生きているのか？」と。私たちがキリストではなく、他のものに執着し、他のものを中心として生きるなら、私たちはキリストのしもべではなく、そのしもべとなってしまいます。

伝道者も言います。伝道者の書 12 : 1 「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。」と。

また、私たちの主人である神様はこう言ってくださっています。エレミヤ書 29 : 11 「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている。—主のことは—。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」と。

そして、ペテロも主人である神様についてこう私たちに紹介しています。I ペテロ 5 : 7 「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」

私たちの主人である神様は私たちを心配してくださる方であり、しもべである私たちに平安と将来と希望を与える計画を立ててくださって事をなして下さり、私たちの思い煩いを全部ご自分のものとしてくださる方です。そして、この主人のしもべとして私たちが生きるとき、私たちは本当に平安と安心と喜びの中を生きられるのです。

### ○寄留者

この手紙をヤコブは、12部族にと書いています。これは文字通り12部族ではなく、世界中に散らされた信徒たちを指す言葉です。「離散している」とありますが、これも私たちが何者かを表す言葉です。言い換えるなら寄留者。

私たちはこのめぐみ教会に集まって礼拝を献げていますが、私たち以外のクリスチャンたちもあらゆるところに散り、そして、世界のあちこちに教会を建てあげ、それぞれの使命に生きています。私たちは地の果てまで出ていく者たちです。私たちクリスチャンの特徴は集まる者であると同時に散る者。主日はこうして集まりますが、明日からまたそれぞれ遣わされる地の果てまで出ていきます。

そこで大切になってくるのは、風が糸につながっているから高く上がっていけるように、私たちもキリストのものとしてキリストに繋がりを続けるということではないでしょうか。キリストと共に繋がり、さらに地の果てまで出ていきたいと願います。風が荒く吹いたとしても大丈夫です。キリストに繋がっているからこそ、私たちは安心して散らされていけるのです。

### ○どう生きるのか

1節にある、「あいさつを送ります」とあります。この言葉は「喜びがあるように」とも訳せる言葉です。ヤコブはなぜこう言ったのでしょうか。ヤコブの手紙の中だけで、この言葉があいさつの言葉で使われています。なので、ヤコブが「喜びがあるように」という言葉であいさつをしたことには何か意図があったように思います。しかも2節にも「この上もない喜びと思いなさい。」と書かれています。喜びというのを強調しているように思います。

ヤコブの手紙を受け取った教会には様々な試練、行いのない信仰、貧しい者と富む者の間にある壁、言葉による痛み、争い、世俗化などがありました。なのに、ヤコブは「喜びがあるように。喜びと思いなさい」と言います。ヤコブはここまでして、教会に、どんなに辛いことや大変なことがあっても、「喜び」を繰り返し語りかけています。

たとえ不完全であり、知恵に欠けていたとしても、神様が彼らを選ばれ、彼らに信仰を与え、約束された神の国を相続するものとされたという事実をもって、ヤコブは試練・困難の中にいた人たちに喜びをもって挨拶を送ったのです。

キリストのしもべとしての歩みは決して楽ではありません。本当に様々な試練に合います。めぐみ教会の2025年の歩み、また皆さんお一人お一人の歩みを振り返っても、たくさんの試練があったと思います。ヤコブも「様々な試練にあうときは」と言っています。

私たちは、経済のこと、人間関係のこと、健康のこと、そして自分自身の弱さや罪のことで、さまざまな試練に出会います。身近なことの中で、いくつも重なって起こる。まさに「さまざまな」試練です。

これまでのめぐみ教会での働きの中でも、私も自分の罪や弱さ、欠けから受ける試練が多くありました。その時に感じることは、なかなか変わらない自分自身への嫌気です。神様もこんなわたしに嫌気さしてないのかとすら思いますし、本当にこんな私を神様は呼ばれているのだろうかと思ってしまいます。全然喜びと思えません。

でも、ヤコブはどんな試練にあっても、この上もない喜びと思いなさいと言っています。そして、ヤコブがこういうのには理由があります。それは、私たちはただの寄留者ではなく、神様とキリストに属した寄留者であり、しもべだから。そして、「わたしの力は弱さのうちに完全に現れる」と言ってくれる主がおられ、苦しい現実の中で、神様が働かれることをヤコブは身をもって知っているから。私たちが忘れてしまいやすい神様のすごさ。

神様は主人である以上に、私たちの父です。ヤコブ1：18でも、「この父が私たちを、いわば被造物の初穂にするために、みこころのままに真理のことばをもって生んでくださいました。」と言っています。神様は、私たちに惜しみなく、とがめることなく知恵を与えてくださる方であり、さらに豊かな恵みを与えてくださる方だから。何よりも主は私たちを慈愛に富み、あわれみに満ちておられるという結末へと導いてくださるから。

ヨブの結末は、苦難が終わり、祝福されて、家族が増え、富が増え、満ち足りた生涯を彼は生きましたが、これを私たちはヨブの結末とするのではなく、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」そして、ヤコブが言ったように、「主の慈愛とあわれみ」です。神様がヨブの生涯を慈愛とあわれみで満たして下さり、完成させてくださいました。

ヤコブは私たちにも、試練によって生まれる忍耐を完全に働かせて、何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となれと言います。忍耐と聞くと、「歯を食いしばる」イメージがあります。でもここでいうヤコブの忍耐は、途中で投げ出さず、神様のもとにとどまり続ける事を指しているように思います。迷いながらも、弱音を吐きながらも、神様のものとして神様から離れない忍耐。そして、神様が完成へと導いてくださっていると言っても、なかなか変わらない自分を見て諦めそうになるけど、自分になして下さっている神様の働きを疑わずに信じ続ける忍耐。

「何一つ欠けたところのない」は完璧な人を私たちはイメージしやすいと思います。でもヤコブが語る完成とは、弱さが消えることではなく、神様にゆだねられない部分が、少しずつ減っていくことだと思います。

私たちを完全な者へと作り変え、完成させ、ご計画を成し遂げられる方が、私たちの父なる神様です。このことを覚え歩むとき、ヤコブのいうように、私たちはどんな状況でも主にある喜びを失うことがなく歩むことができます。私たちは、整ってから神様に従う者ではありません。整っていないまま、神様の前に立ち続ける中で、少しずつ、しかし確かに神様によって造りかえられていきます。私たちがどんな状況にあっても、神様の御手の内に全てはあります。

私たちは、キリストに従う歩みにおいて、しんどさがあるから、弱さがあるから自分には無理とってしまうことが多くあります。でも崩れやすい自分を抱えたまま、神の前に立ち続ける訓練へと、キリストのしもべとしての歩みへとこの1年も、神様は私たちを招いておられます

#### ○まとめ

今日の箇所から、私たちは、自分たちが何者であるのかということと、どう生きることが期待されているかについて確認しました。まず私たちは、神様とキリストのものであり、しもべ。だから、いつも主を中心に生きる者として生きる。また、私たちは地の果てまで福音を伝えるために出ていく寄留者。だから、キリストに繋がり続け、一箇所にとどまり続けるのではなく、主に遣わされるところに出ていき、キリストを伝え続ける。そして、たくさんの試練にあっても、主の慈愛とあわれみがあることを知っているがゆえに、喜びを失わない者。だから主にあって主と共に前に進んでいける。

これからもそれぞれの遣わされた場所で、キリストに繋がり続け、神とキリストのしもべとして、散らされていても、試練にあっても、喜びをもって、キリスト者としての恵みを受け取りつつ、使命をなしていきましょう。私も、これからの3年間、この道を進みます。喜びを失わず、主のものである者として。

祈ります。